

パンデミックの終息の後に



早 下 隆 士

新年を迎えまして、会長としてご挨拶申し上げます。

パンデミックの状況は3年目に入りました。この2年間、改めて日常とはいかなるものであったかを考え、人々は多くのことをあらゆる分野で手探りの中に見いだしてきています。

人々の移動および会話が制限される日々に、例えば我々が学会等で現地へ赴き、会員同士が交流を深め、自らの熱い言葉をもって、情報交換をすることが、いかに重要であったかを思い知ったことは共通の理解でしょう。現状、年会や討論会は、オンラインで実施されています。ツールに助けられ、スムーズさに欠ける部分があるにせよ、100年前のスペイン風邪のパンデミックのときより、より積極的にCOVID19に人類は立ち向かっています。歴史上の多くのパンデミックには、必ず終わりがあります。日常を取り戻し、我々が以前にもまして積極的に研究、討論ができるようになった時のために、本年の一日一日を大切な準備の日々としましょう。

さて2022年度に向けて、学会本部の新しい取り組みをお知らせします。まず第1に、本学会の会員管理システムや年会・討論会の支援システムを、新しくアトラス社が運用するシステムに昨年末から変更しました。アトラス社は、日本化学会や本学会と同規模の学会など、多くの国内学会にシステムを提供している実績があり、何より会員管理システムと年会・討論会支援システムを連動して運用できるメリットがあります。このシステム変更によって、会員の皆様の利便性が更に向上し、本部事務局の運営においても、よりいっそうの効率化を進めることができます。第2に、デジタルトランスフォーメーション(DX)が進む中で、機関誌である「ぶんせき」誌は、この3月から冊子体の配信を取りやめ、マイページからの電子版での閲覧に切り替わります。これまで会員減少に伴い、冊子体のみでの広告収入も減る一方でしたが、様々な企業の分析技術を、技術紹介という形で「ぶんせき」誌に掲載し、学会ホームページを通じた関連企業のバナー広告と繋げることで、新しい広告の形態を開拓しています。また、これまで「ぶんせき」誌で紹介しておりましたミニファイルの情報は、ミニファイル再収録版として書籍化し、ネット販売することも決定しました。進歩総説は、和文学術誌である「分析化学」誌の学術論文とすることで、「分析化学」誌が更に充実するようになりました。第3に、この1月から本会英文学術誌である *Analytical Sciences* 誌の編集機能を本学会に残したまま、出版・販売・ホームページ業務などの独占的出版権を、Springer Nature (SN) 社へ委託しました。知的財産権は本学会に残し、本学会の公式出版物としてSN社が宣伝を開始します。全世界に販路をもつSN社が出版業務を担当することで、論文の *circulation* が格段と向上し、同社の他雑誌との原稿転送が自由に行われることで *visibility* の向上も期待されます。

この他、来年度の理事候補者として3名の女性研究者を理事会のオブザーバーに迎え、女性研究者ネットワーク・男女共同参画推進をご担当頂いています。また、産官学連携を目指した「分析イノベーション交流会」や「ものづくり技術交流会」も新しい取り組みとしてスタートしています。

より積極的に会員の皆さんが参加したいと思う学会を築くことが、会長の使命です。困難な状況ではありますが、歴史ある日本分析化学会の存続のために会員の皆様、理事会構成員、および事務局の皆様のご理解とご協力を、どうぞ宜しくお願い致します。

(Takashi HAYASHITA, 上智大学理工学部, 日本分析化学会会長)